

△討論▽

松本 町村是運動の出てくる時期が、和歌山ではずいぶん遅れるが、その理由は。

橋本 一般に、町村是運動は農会を通じて展開されていくのだが、

和歌山では、県農会ができてから、郡農会・町村農会ができるまでにかなり時間がかかっている。そういうことが理由の一つだろう。

松本 町村是運動の実質的メリットは。

橋本 大体は技術的なもので、確かに生産力は伸びている。

長谷川 この当時の和歌山の村の状態はどんな様子か。村が、そういう運動を拒絶反応なしに受け入れたのかどうか。

橋本

確かに。地方改良運動の中で神社合祀があつたが、和歌山では大へん強い拒絶反応が起つてゐる。

松本

農村社会学が大正の初めくらいから出でくる。この頃の文献に、既に農村計画に触れる文章が出てくる。この辺の文章を検討・整理しておく必要があるう。

ところで、牛野さんの農業土木学会での農村計画研究部会のような部会は一九六〇年末から七〇年代に作られている。それからは農村の生活改善とのかわりでとり上げられていくようだ。それは、自治の延長上でとり上げられた農村計画とはどう違うのか。そういう点は問題にならないか。例えば、京都では「ろばた懇談会」（研究通信一一九）があるが、その中で農村改善のテーマのうち三分の二が生活改善だ。この

「ろばた懇談会」も時期的には、農業土木学会で農村計画部会などがとり上げられていく時期と重なつてゐる。社会教育とのからみでも農村計画が問題になつてくる。

牛野

本質的には、その辺が問題であろう。建築学の方では農家住宅の改善がずっと行なわれてきたが、住宅だけでは生活改善にならないということで、地域全体の施設配置が問題になっていく。また住民参加の問題については、一九七〇年代末になつて出でくるのだが、今のところ計画を作つても具体化しない。

長谷川

「農村計画」とか「村づくり」といった考えは、それぞれ時代の節にあたる時期に出でくる。またある時期ごとにおい

牛野

神戸市の場合一九六九年から七三年頃、丸山地区での町づくり運動があり、それを受けて七三年頃から神戸市農政局が動き出している。神出では、最初は、これこれの事業があるからというのではなく、大へん漠然としたところから始まつた。まず、「自己調査点検書」というのを作つて、住民の意向を調べた。そこから出てきた計画課題を有機的に関連づけて、地域の中での優先計画をとり出していった。その中で、基幹的なもの、すなわち圃場整備事業を決定した。それに、他の様ざまな問題、例えば次三男の住宅問題といったようなものをつけ加えていった。

長谷川 特別の意図はなかつたわけか。

牛野

なかつた。この地区は明石からの街道すじにあつて、わりに豊かで、ことさら何かしなくとも、今のままで十分食つていけるし、兼業機会も多い。つまり片手間農業が多い。その中で、何かをするとか、農業投資を行なうとかのための合意形成はなかなかできない。今までのやり方では住民がウンと言わない。

長谷川 現代の農村では、地域農業ということが呼ばれはじめた。

そのリーダーは、その地域で生活している役場の吏員や農協職員のようなテクノクラートが担うだらうと高橋正郎氏は指

摘している。

牛野 確かにテクノクラートの存在が出ており、重要な役割をはたしていると思う。しかし、一方では研究者がどのようにかわっていくのかということも重要な問題となると思う。

松本 そういうリーダーの問題や、研究者のかわり方という点を考えしていく上で、「ろばた懇談会」の評価をもう一度したいといけないと思う。というのは、十年前にした「ろばた懇談会」から五年程たってから、成果というか、芽がでてくると思うのだが、どういう芽が出て、どうなっていくのかというようなフォローがなされていないからだ。

長谷川 農村計画・地域開発の中で地域エゴが出てくると思うが。

牛野 ありますね。神出では、溜池の水利慣行が大へん強く、それを調整しないといけない。しかし、この水利慣行の壁は大へん厚くて調整できない。慣行の壁は人の壁なわけで、こいつの場合、慣行は人づくりから始まらないといけないし、具体的に計画を進めていくなかで、住民に力量をつけていくことが重要だと思う。

高木 ところで、橋本会員の明治と牛野さんの現代とのつながりだが、計画をどこが発議してくるのか。明治では国家であることは明らかだし、牛野さんの例でも、どうもやはり行政がやり始めている。それだけのニードがあったのではあろうが、やはり外からの働きかけがあり、その中で住民をひっぱつていいくわけだ。これは運動論だが、こうしてひっぱつていった

後どうなるのだろうか。マクロには資本主義の展開に対しても

農業生産部門を適応させていく啓蒙運動だが、こういうものは、いったい住民自治とか、住民主体と言えるのだろうか。

小山 高木会員に少しつけ加えるが、牛野さんの言うように、科学的計画を実践し、その中で住民の力量をつけていくという方向はあつただろう。しかし、現実的には、それは多分、集落レベルか旧村レベルまでのものでしかあり得ないだろう。

橋本 和歌山では、青年団の動きを見ると、以前の若衆的なものはだめだ、村の人間ではなく、いつでも世の中に出でていける人間を作らなくてはいけない、と考え訴えるような開明的なリーダーが出ていている。しかし、そういう人が出てきて運動していながら、それが集団としての運動につながっていかない。こうしたリーダーが、自発性を持ってと住民に呼びかけ、運動を続けていくうちにボンヤツていく。そういう意味で、自発性がつきくずされていく時代として明治を見る。

高木 しかし、そういう自発性は、けっして長づきしない。自発性という言葉のもとに住民を動かしていくけれど、すぐにボンヤツてしまう。

牛野 たしかに、やり方によつては昭和七年の農山漁村更生計画のようになっていく危険性はある。そういう意味からも、住民の力量をどのようにつけていくかが問題となろう。神出と

のかかわりで言えば圃場整備事業などの進んでいくなかで、社会構造も大きく変り、住民は少しづつ力量をつけてきたよう実感している。また広域計画の問題に触れておくと、広域レベルの計画と集落レベルの計画を推めていく過程で、かなり大へん強い緊張関係が起り、その調整をしていくなかで住民参加の可能性が出てくる。そういう参加が主体的に行なわれていくことによって住民の力量についていくだろうと思う。